

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【授業担当者】

所属/職名：法文学部 教授/准教授

氏 名：尾崎孝宏/兼城糸絵

授業科目名	文化人類学実習1
研修先 (大学・国・都市名)	全北大学校(韓国・全州市)
研修期間	令和 5年 8月 27日 ~ 令和 5年 9月 3日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>本研修は、文化人類学的フィールドワークを教育する上で入門編にあたる。以下の4点を目的としている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.韓国における異文化体験を通じて、自身の持つ文化的バイアスを自覚する。</li> <li>2.文化相対主義的な視角を獲得する。</li> <li>3.鹿児島大学の学生と全北大学校の学生が協力して、事前に決めたテーマに沿って初歩的な社会調査を体験する。</li> <li>4.日韓という枠組みにおける異文化理解への到達プロセスの特性について認識する。</li> </ol> <p>この目的を達成するために、今年度の実習では学生を2つのグループに分けて事前に調査テーマを設定した。現地実習では、全北大学の学生とともにアンケートやインタビュー、観察等の社会調査を実施した。実習期間中には現地で中間報告会および最終報告会を開催し、全北大学の教員や学生らに調査内容に関するコメントをしていただいた。</p>	
<p>〔研修の成果〕 *事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>事前学習では、ディスカッションを通じて現地での調査計画のブラッシュアップに努めた。その結果、2つの成果が現れたと考えている。ひとつは、調査計画がより綿密なものになると同時に、異文化と向き合う際につい陥りがちな「自文化バイアス」をある程度自覚することができた点である。そしてもうひとつは、グループで調査を行うため、それぞれの役割分担を明確にし効率的な調査が実施できるように準備した点である。この2点は韓国で現地調査を行う際に大いに役立ったと思われる。</p> <p>調査期間中は、鹿児島大学の学生と全北大学の学生が協力して調査を実施した。その際、教員はあくまでアドバイザーに徹し、調査の遂行やデータの整理もすべて学生たちが自主的に行っていた。日韓の大学生が合同調査を行う過程で積極的に意見交換を行った結果、それぞれの学生たちは自らが持っていた「日本」あるいは「韓国」に対する文化的バイアスに気づき、それをある程度修正することに成功したように思う。こうした経験は、合同実習ならではの出来事であるように思う。</p> <p>また、今回の実習を通じて異文化理解の方法を体得できた者も少なくない。学生たちが海外で体験したことを周囲の人びとと共有し、異文化の見方を伝えていくことも地域のグローバル化に貢献できると思われる。学生たちは韓国の大学生とSNSを通じて現在も交流を続けており、日本(鹿児島)や韓国(全州)での再会を約束している。このような「草の根交流」がグローバル人材の育成のみならず地域活性化の鍵となっていこう。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>本プログラムは、基本的に鹿児島大学の学生が韓国に行って全北大学校の学生と合同で社会調査を行うという枠組みで10年以上継続しており、大きな成果を挙げている。特に、事前・事後学習に韓国側とオンラインでの交流を取り入れることがとても効果的であったため、今後も続けていきたい。</p> <p>全北大学側と研修の円滑な実施のためには外部資金等による経済的援助が得られた方が望ましいが、近年の補助金の傾向として短期(1-2年程度)の資金を次々と探して獲得する必要に迫られている。無論補助金は毎年獲得できるものではないので、本事業のような学内での措置が長く続くことを祈ってやまない。</p> <p>また、全北大学校には、本実習のような短期滞在者が安価で宿泊できるゲストハウスが用意されている。全北大学校の実習を受け入れるにあたり、本学にはそうした施設が用意されていない点が大変心苦しく感じている。ぜひとも何らかの形で整備していただければ幸いです。</p>	